

地政學者としての頼山陽

内田 秀雄

一、はしがき

二、地政學者としての生立ち

三、地政的詩人

四、地圖に關して

五、地政論

六、北方問題

七、結び

一、はしがき

近世に於ける地政學者として、西川如見、佐藤信淵、平田篤胤、果また吉田松陰などと數多くの人々をわれわれは知つてゐる。これらの他に省みらる可くして未だ省みられざる、詩人にして、史家なる頼山陽をも亦その一人として、茲に紹介したいと思ふ。

二、地政學者としての生立ち

地政學者としての生立ち。菅茶山が宮島參詣の途次、頼春水を訪ねた際に、年齒いまだ九歳に過ぎなかつた山陽もその席に列し、林子平の「三國通覽」や、珍らしい紅魚の化石などを持ち出してその一見に供し、茶山をして「久太郎、甫めて九歳、秀發にして、戲弄を好まず、客をこのんで侍座しつゝ、終日倦まず、詩と書畫を學び皆觀るべし」と言はしめた程の利發さであつた。これに依つて、彼の志向と當時の教養とが窺はれ、今日の所謂自然地理的、乃至人文地理的素養が積まれたと言はれなくとも、少なくともその方面に尠からざる關心を有してゐたことが知り得るのである。

寛政四年、山陽十三歳の時、ラツクスマンが伊勢幸太夫などの漂流民を送つて松前に來たり、「今や虎狼の赤夷北に隣し、其間また叛亂常なき毛夷あり。若し赤夷來り襲はゞ八百里の地悉く彼が有とならん」(招かれて松前藩に文武の道を講じた大原左金吾の言)と恐れられ、蓋し、當時の大問題であつた。多感の少年山陽はそれらの公文書を手寫し、「擬て人爲觀軍客使赴松前」と題して、

檠^レ施遠出白河關、

南部津輕道路難

威信遙四卓三種外

選名應播八州間

西來漸入^ニ蝦夷國

東望終無^ニ日本山

勤業隨成中使令

錦幘皮席何時還

と賦し、早くも北方問題に多大の關心を示してゐるのである。

寛政元年、備中の地理學者、古川古松軒は春水を江戸の屋敷に訪ね「和蘭鉤股法」(遠近測地術)を授けたことがあるが、越えて、寛政七年、古松軒は安藝にて又春水を訪問した。この時山陽は彼に出會ひ、彼に依つて啓發

される所頗る多く、山陽の地理的識見は先づ彼に依つて養はれたと言つてよい。この事は後年山陽が「古川翁傳」(文政十一年)なるものを制作して「余、十六歳ノ時、翁來リテ藝ニ遊ビ、先人ト舊アルヲ以テ來過シ、手ツカラ海内ノ輿地、及ビ四隣ノ略圖ヲ寫シ、來ツテ予ニ贈リ、且曰フ、聞ク豎子、頗ル告語スベキモノナリト。願クハ此ノ學ヲ爲メヨト。予時ニ疾アリ、時ニ見ルコトヲ得ズ、而シテ翁去ル。余コレヲ熟玩スルニ、世ノ地圖ト大ニ異ナリ、州郡ノ界ヲ畫セズ、特ニ山川ノ脈理ヲ示シ、略州名ヲ傍ニ略署スルノミ。余コレニ因ツテ、海宇ノ大勢ヲ識ルコトヲ得タリ。ステニシテ四方ニ遊ビ、以テコレヲ驗スルアリ。史ヲ作り、且事ヲ論ズルニ及ンデ依據スル所多シ。皆翁ノ賜モノナリ」(原漢文)と贅して居ることに依つて窺ひ知り得るのであつて、後に述べる處あるが如く、彼の論策の地理の上にその基礎を置き、その史、その詩の地人一體的、謂はゞ地政學的記述に光彩を放つてゐるのも實は古松軒に由來するものと觀なければならぬ。

その後、彼は江戸に、京都に或は九州にとしばしば遊び、既に體得せる地理的精神を以て東西南北の風物を觀察し、茲に山陽獨自の地政學的史學を建設し、地政學的詩の多くを制作したのであつた。而して、名は實の資なりとか。山陽の幼名を「久太郎」と言つたが、長ずるに及んで書經の堯典の黄河の水の「懷山襄陵」より「襄」が命名されたが、天下の通稱は、「山陽」であり「三十六峰外史」である。しかもこの二者は何れもが氣宇の豁達なる風土的香りの高いものである。寛齋、穀堂などと本人でなければ理の解りかねるが如き當時の一般の傾向と凡そかけ離れたる所に名詮自稱、彼の地政學者としての本領があると言ひ得ると思ふ。

三、地政的詩人

山陽の本領は史にあらず、實にその詩にあつたことは自ら稱して「頼襄が藝は詩を爲第一様に候」と言つてゐるに徴して、何人も異存のない所であらう。

山陽の數多くの著述中、彼の生前に世に出版せられた

ものは「日本樂府」のみである。日本樂府は悠久なる皇國史を彼の得意の詩を以て叙述したものであつて、謂はゞ一種の愛國行進曲である。その生前に出版せられし所などから觀てもこれに對する彼の氣持も察せられるのであるが、われわれをして感激せしめるものはその編輯の周到なる用意である。即ち、その劈頭に「日出國」を掲けて

日出處、日沒處。

兩頭天子皆天署。

扶桑雞號朝已盈。

長安洛陽天未曙。

羸顛劉馱趁日沒。

東海日輪依舊出。

と語り、皇國の東海に堂々たる地歩を占めてゐる地政學的宣言をなし、終りを結ぶに「裂封冊」を以てし、外國干涉の斷乎排撃すべきを高言してゐることである。ここにも後に述べる國防的態度がみられる。更に又、我が國空間的擴がりの六十六州に對應するやうに、二千五百年の歴史を六十六首を以てし、その跋文に「我國風氣人物

何必滅_ニ西土_ニ」と稱し、「名教之是非」を主眼し、樂府全體を貫く精神は榮光ある皇國土とそこに置しくも咲き出だされた國史の華を證じたものである。

更に百千を以て數へられる山陽の詩の特色は如何。詠

史（これは「子成の長技」）、叙景の別はあれ、その思考の東西南北の地理を經となし、古往今來の歴史を緯となせる所の謂は、一種の地政學的詩である處に彼の詩の大特色があると言はねばならぬ。例へば最も人口に膾炙せる「川中島」の詩を觀ても、犀川の敘景があるかと思へば忽ち十年の歴史にかへり、一轉して再び流星光底なる宇宙視野の擴大に歸へる奔放自在の地歴一如の銘詩である。

「下_ニ筑後河過_ニ菊池正觀公戰處_ニ感而有_レ作」の長詩も亦さらにこの感を深くする。試みに、その末尾のみを引用しても

河流滔々去不_レ還

遙望肥嶺纏_ニ雨雲_ニ

千載姦黨骨亦朽

地政學者としての類山陽

獨有_ニ苦節傳_ニ芳芬_ニ

聊弟_ニ鬼雄_ニ歌_ニ長句_ニ

猶覺河聲激_ニ餘怒_ニ

地と血の合一的地政詩であり、一誦、二誦これを吟ずる者をして思はず與憤感起せしむるものある所以も茲に之を求めねばならぬ。所謂詩人の身也雜事的詩とその類を異にするものである。

更に尙「雲か、山か、吳か、越か。水天髣髴、青一髮」にみられるが如く、山陽の詩の特色は中山久四郎博士も指摘せられしが如く、日本を孤立的に考へず、眼を常に外に注いでゐたことである。これは彼の一識見であると共に彼の地政學的教養の然らしめた所と考へたい。偶目の二三を紹介するならば

烽火台詞、

西鎮新開烽火台

墨磨_ニ楯鼻_ニ屬_ニ雄才_ニ

第二十九卷 第一號

七七

憶君長嘯漫欄處

萬里雄風鞞鞞來

俯視晴濤萬里風

鯨鯢伏處碧如油

雲生天際果何國

不_レ是朝鮮_ニ是滿洲

阿帽嶺

危礁亂立大濤間

決_レ瞥西南不_レ見_レ山

鶴影低迷帆影沒

天連_レ水處是臺灣

逢_ニ重陽_一

吾生三十九重陽

幾處黃花泛_ニ酒觴_一

商略登高誰第一

薩山盡處望_ニ南洋_一

雜誌

地壓蜻蜒尾

城濼蛟鱗頭

浮雲橫_ニ呂宋_一

惡浪撼_ニ流虬_一

寒草常春萼

賈船或越舟

羈施猶有_レ喜

十月未_レ披_レ裘

四、地圖に關して

山陽の作成せる地圖にして世に傳はるもの數葉がある。

一、題_ニ自製禹貢圖_一

二、題_ニ自作輿圖(日本地圖)

三、題_ニ自製地圖_一

四、題_ニ自製和漢史蹟圖_一

これらの地圖制作の精神は「國郡方位大半齟齬セリト雖モ、山脈ノ起止、水勢ノ源流、亦以テ概略ヲ識ルニ足ル。而シテ攻守ノ利害、又掌ヲ指スベシ」(題_ニ自作輿

圖一「山水ヲ觀ルハ、經史ヲ治ムルト同ジ、先ヅソノ大綱ヲ見ルヲ要ス。又文章ヲ作ルト同ジ。首尾貫通スルヲ要ス。京ヨリ鎮西ニ趨ク地勢山脈大概此ノ如シ、胸中ニソノ節族ヲ領シテ往ケベ、則チ眼裏ソノ條貫ヲ得、雲霧中ヲ行クガ如クニ至ラザルナリ」(題ニ自製地圖)「古人ノ遊、必ズソノ景勝ノ大ナルモノヲ識ル。而シテ後、小ナルモノ、臨觀ノ下ニ逃隱スル能ハズ、シカラザレバ則チ婦孺ガ伊勢ニ詣デ、觀音ヲ歷拜スルトナンゾ擇ベン」(題ニ和漢史蹟圖)とあるに依つて明らかであるが、これらの地圖が講席に貼りつけて學徒に示したり、大槻磐溪が九州に遊歴せし際に沿道の地圖を書畫をよくせし彼が一流の筆を以てかき與へたものであるから、あくまで實用本位の歴史の説明の土臺となれば足りるものである。従來の輿圖があつても、山河形勢を指すものなく、地人の關係を論ずることが出來ぬ。こゝに「臆に據りて」これらの圖を作成したのであつた。即ち彼の地政的論談のためにものせられたものであつた。これらの地圖は一つは長くも御物であり、その他諸家に珍藏せられて、われ

われの眼に及ばぬ。が、地圖そのものも、繪畫に於いても一家をなしてゐた彼の事として相當なものならんと思はれる。

五、地 政 論

「新策」「通議」「日本外史」の論贊などに彼の地政學的識見の多くが觀られるのであるが、蛇足に類する説明を省いてその二三を引用することとする。

新策 輿地略

皇和ノ國、大海ノ心ニ處シ。蓋シ東西六百餘里、南北二百餘里。其形磬折ノ如シ。故ニ其ノ地脈中ニ起リテ左右ニ降ル。中最モ隆シ。東北之ニ亞ギ、西南最モ織ナリ。皇化西南ヨリ興リテ東北ニ漸ル。故ニ遼古能ク西海外ノ朝鮮、渤海諸藩ヲ服ス。而シテ東北スナハチ連山斜ニシテ之ヲ限ル。連山以往之ヲ毛夷ニ棄ツ。(中略)

凡ソ海内ノ形勢及ビ風氣民俗、大抵畿内以西ノ民農ヲ勤メ少熟ナリ。東北ノ民農ニ惰ニシテ多熟ナリ。

皆魚鹽蛤蠃ノ利ヲ仰グ。畿内及ビ阿波讃岐以東、伊勢以西ソノ風氣同ジク、其ノ地小險小沃ニシテ、其ノ民柔軟ニシテ機利ヲ好ム。其ノ言語浮俐ニシテ其ノ産ハ則チ織工ノ奇技ニシテ、其ノ港泊或ハ任俠多クシテ、之ヲ要スルニ武ヲ用フルノ地ニ非ザルナリ。

(中略)

關八州、尾張以東ノ諸國、其ノ地大沃ニシテソノ人爽達果斷、武ヲ喜ビ、其ノ言語斬截、ソノ産ハ則チ竹箭、利刀、善馬、(中略)

常陸、陸奥、出羽、其ノ地大險大沃、其ノ人關八州ニ似テ樸摯、其ノ言語前卑後高、其ノ産ハ則チ巨牛善馬、其ノ樸摯愈々甚シ。毛人ハ乃チ其ノ極ナル者ナリ。(中略)

山陽、山陰、西海及ビ伊豫土佐其ノ風氣概ネ同ジ。其ノ地小險小沃。其ノ民鄙消、其ノ言語卑賤、其ノ産ハ則チ薦席織布ナリ。特ニ肥前土佐以西ハ頗ル大險大沃ナル者アリ、其ノ民頗ル信濃、陸奥ニ類ス

(中略)

琉球最モ織軟ニシテ制シ易シ。故ニ其ノ禮ヲ執ルコト尤モ恭シ。蓋シ地脈ノ右ニ降ル者此ニ極リテ、左ノ強ノ如キニ非ザルナリ。(下略)

こゝに觀られるのは素朴ではあるが、純然たる地人論であり、地人合一論である。

日本外史 後北條氏

外史氏曰ク。天下ヲ制馭スルハ、形勢ヲ善クスルヨリハ莫シ。苟モ形勢ヲ失ヘバ分裂ヲ致サザル者鮮シ。昔シ文武ニ在リテ、山海ノ形便ニ因ツテ以テ七道ニ分チテ、王畿中ニ居ル。桓武平安ヲ定鼎シテ四方環嚮ス。蓋シ亦盛ナリ。然レドモ王政ノ衰ルヤ、方隅ノ稍竊ニ據リテ制ス可カラザル者アリ。或ハ速ニ討滅ニ就クト雖モ天下ノ勢漸ク分列ヲ致シ、以テ錄倉ノ覇ヲ馴致ス。是ヨリ以還、關東ノ形勢常ニ天下ニ雄タリ。而シテ京畿之ニ能ク勝ル莫シ。

余嘗テ東西ヲ歴遊シ、其ノ山河ノ起伏スル所ヲ考
ヘル、以爲ラク我邦ノ地脈東北自ヨリ來リテ漸ク西
シテ漸ク小ナリ。之ヲ人身ニ譬フレバ、陸奥、出羽
ハ其ノ首也。甲斐信濃ハ其ノ脊ナリ。關東八州及ビ
東海諸國ハ其ノ胸腹ニシテ、京畿ハ其ノ腰髻ナリ。
山陽、南海以西ニ至リテハ則チ股ノミ、脛ノミ。
故ニ其ノ腰髻ニ居レバ以テ其ノ股脛ヲ制スベシ。以
テ其ノ腹脊ヲ制ス可カラズ。且ツ平安四戰ノ地、天
下事有レベ必ズ先ツ兵ヲ被ル。鎌倉ノ獨リ一面ヲ以
テ西中原ヲ制スルニ如カザルナリ。元弘ノ時ニ至リ
テ、能ク一舉ニ北條氏ヲ取ル者ハ、海内怨ミ畔キ、
禍其ノ腹心ヨリ起ル、能ク西ヲ以テ東ニ勝ニ非ザル
ナリ。其ノ盛時ニ方リテハ鎌倉ヲ以テ根本トナシ、
府ヲ京師、筑紫ニ置ク。其ノ天下ヲ制スルコト臂ノ
指ヲ使フガ如シ。而シテ足利氏ハ其ノ爲ス所反シ、
彼ヲ舍キ、此ニ居ル。謬テリ。然レドモ亦已ムヲ得
ザル有ルナリ。彼ハ南朝ヲ慮リ鎌倉ニ遠ク居ルコト
能ハザルナリ。故ニ鎮メルニ子弟ヲ以テシ、室町ニ

藩屏ス。而シテ適爭端ヲ啓ク、又其ノ内訌ニ因リテ
之ヲ覆ス。而シテ室町遂ニ是ヨリ亂ル。

是レ其ノ四方ヲ制馭スル能ハズシテ以テ王家ノ敗
ヲ襲フ者、形勢ヲ失フ故非ザランヤ。其ノ季世ニ及
ンデ七道豪傑、更ニ相呑噬シ、元龜、天正ノ間ニ至
リテ、海内裂ケテ八九トナリ、其ノ最大ナルモノ四
氏ナリ。曰ク、北條氏、曰ク、武田氏、曰ク、上杉
氏、曰ク、毛利氏。

毛利氏ハ安藝ニ起リテ山陽、山陰ノ十三州ヲ並べ
テ疆土尤モ廣シ。其ノ次ヲ北條氏トナス。北條氏ハ
伊豆ヲ取リテ之ニ據リ、遂ニ關八州ヲ並ブ。

武田氏ハ甲斐ニ起リ、信濃、飛驒、駿河、上野ヲ
並ブ。

上杉氏ハ越後ニ起リ、越中、能登、加賀ヲ並べ以
テ莊内、會津ニ及ブ。

皆爭フテ耕戰ニ務メ、帶甲數萬、積粟山ノ如シ、
襲驥虎視、東西ニ角立シ、擧ゲテ宇内ヲ包ムノ心ア
ラザル莫シ。

夫レ、北條氏天下ノ胸腹ニ據リテ、其ノ兵ヲ出シテ、以テ中原ヲ窺フ能ハザルハ、武田、上杉其ノ脊ニ據リテ以テ其ノ衝ヲ横塞スレバナリ。而シテ二氏勢力相敵シ、相持シテ決セズ、又其ノ西ヲ圖ル暇アラザルナリ。

毛利氏、疆土廣ト雖モ其ノ股脛ヲ以テ其ノ腰臂ニ向フ。固ヨリ中原ニ抗衡スル能ハザルナリ。

織田氏、四氏ノ中ニ介立シテ、其ノ西ヲ先ンジテ其ノ東ヲ後ニス。強ヲ避ケテ弱ヲ撃ツ、險ヲ舍キテ夷ヲ取ル。是ヲ以テカヲ用フルコト少クシテ、功ヲ成スコト速シ。

豊臣氏、亦其ノ遺謀ニ因リテ遂ニ以テ合一ヲ致スコトヲ得タリ。

織田、豊臣ノ形勢ニ於ケル察スル有ルガ如シ。而シテ其ノ居ル所ニ至リテハ足利氏ト未ダ嘗テ大異同有ザルナリ。其ノ既ニ合シ又裂ケテ久シク天下ヲ馭ス能ハザル所以ノ者ハ亦此ニ出ズルヤ。(下略)

これに依つてこれを觀れば、國史の治亂興亡は全く、

その山河形勢の把握の如何に懸つてゐるを論判せる純然たる地政學的主張である。

通議 論 水 戰

我國、大海ノ心ニ處ルコト猶ホ天ノ壑シテ之ヲ四周スルガ如シ。是レ其ノ恃ンデ以テ寇ヲ防グ所ニシテ、寇ノ敢テ窺ハザル所ナリ。然レドモ恃ムハ、我其ノ險有ルノミ。寇ヲシテ之ヲ有ラシメバ、猶ホ險無キガ如キナリ。彼ノ六朝ヨリ宋ニ及ブ皆、江險ヲ恃ンデ、以テ江寇ヲ防グ、然レドモ之ヲ江南ニ防グハ江中ニ防グニ如カズ、江中ニ防グハ江北ニ防グニ如カズ。他ナシ。我ニ有ルカ、敵ニアルカ。敵ト我ト分レテ殊アルナリ。(中略)

豊臣氏ノ北陸ヲ伐チ、南海ヲ伐ツニ每ニ船軍ヲ以テ別ニ進ンデ勝ヲ取ル。其ノ朝鮮ヲ伐ツニ及ンデ、スデニ王城ヲ取りテ舟師全羅ノ水兵ノ扼スル所トナリテ、策ノ應ズル能ハザリシハ、以テ終ニ志ヲ得ザル所以ナリ。故ニ寇ヲシテ志ヲ得ザラシメント欲セ

べ、水戰講ゼザルベカラザルナリ。

四面環海の我國を論じ、長鞭馬腹に及ばざるの水の交通遮斷性を論じ、この遮斷性もこれを利用する者の如何によつて正、反兩様の性質を呈することに注意し、今日の所謂制海權の確保が勝敗の分る、所以を述べ、大東亞戰下の今日特に興味深く覺ゆるのである。

更に、これらの地政論の結びとして次の一文を紹介したい。

送_ニ廣瀨以寧歸_ニ白河_ニ序

城之尾、攝之頭、其山秀、其水瑩、所_ニ以_ニ養_ニ其氣之
英明_一也。左望_ニ豫佐_一。右控_ニ豐肥_一、浩波怒濤、接_ニ清
與_ニ韓_一。所_ニ以_ニ養_ニ其氣之宏濶_一也。富士之嶽、跨_ニ相
擁_ニ駿_一。突_ニ兀_ニ乎_ニ衝_ニ天虛_一。所_ニ以_ニ養_ニ其氣之高傑_一而岐
蘇之峽、雷乎鬪。龍乎陸。所_ニ以_ニ養_ニ其氣之沈深奇
偉_一也。氣養而成也。(中略)

天下之山嶽河海、皆助_ニ子_ニ以_ニ養_ニ其氣_一矣。子其勿

地政學者としての頼山陽

負_ニ天下之山嶽河海_一。

六、北方問題に關して

寛政四年、露艦の北邊に出沒して天下を騒がし、少年山陽もこの方面に異狀の關心を示したことに就いては先に一言した所であるが、大原左金吾は春水を長崎よりの歸途訪ねたこともあり、春水の江戸勤務中もしくは彼を訪問して、蝦夷地に關する風聞を語つてゐるのであるが、元來左金吾は先に一言しておいたやうにロシアの勢力を過大評價したやうで、彼が招かれて松前に至り、疑心暗鬼、松前道廣が赤夷と内應してゐると言ふ噂を聞いて、松前を辭し、道廣の隱謀を水戸方面や幕府に訴へ出したのである。

かかる傾向の人物より多感の青年山陽は相當に煽情的に北方事情を聞かされたに違ひない。

後に、文化二年頃、露艦の再び北方に來襲するや、山陽は耳を聳て、その動靜を注視してゐる。これも大原左金吾と親交のあつた菅茶山に宛てた手紙の終りに「オロ

シアもともと歸へり去り候由。海寇出沒、常態なく、い
かが候やらん。御聞きなされ候はゞ、御申越し下さるべ
く候」と言つてゐる。

越えて、文化四年四月五月又もや蠟夷人が蝦夷に來寇し
幕府では若年寄、堀田正敦等をして蝦夷地巡視せしむる
こととなつた。この警報を得て山陽は茶山に次の如き手
紙を出してゐる。

邊報御聞きなされ候哉、北邊の傳聞一卷に仕り候。

江戸よりは近藤氏差遣はされ候由。何卒先生の知に
負き申さざる様、希ふ所に候。此度の義、先生如何
思召し候や。根なき浮足の戊卒幾千萬御座候とも、
何の益する所あるべくや。

松前の國除せられ候事自から藩籬を撤すと申すべ
く、失計これより大なるはなく候。

赤土は百魯西亞ありとも必ずしも畏るべからず。

唯内地物情恟懼變を生じ候はぬやうにあれかしと杞
憂止むなく候。

これは松前藩が「非常の備等其方手限難行届」故を

以て松前及び西蝦夷の土地を命ぜられ（東蝦夷は享和二
年上地を命ぜらる）しことに眞向から反對してゐるので
ある。後の手紙にも論じてゐる通り、幕府方に「物の用
に立ち申」すものなく、北條氏の蒙古を拒いだのも四國、
九州の諸氏の活躍に依ることを論じて北邊の警備は北邊
のものにまかすべきを主張してゐるのである。

文化四年の暮に、春水は國元の船頭で近來八年間も松
前交易に従事する新太郎を自邸に招いて色々北海、カラ
フトの漂流談を聞いたことがあつた。同席してこの話を
聞いた山陽は

家君、新を呼び、これに酒を飲ましむ。酒酣にして、
すなはち奮つて曰ふ。小人虜境に在りて、亦行伍に
編せらる。一短刀を佩び必ず虜腹を刺さんと怒した
りと。又曰ふ、我邦の船は以て戦ふべからず。誰か
戰艦を造るものぞ、臣まさにこれを教へんとすと。

あゝ、東事の作ありてより人々退怯す、誠に其れ
をしてみな新の敵愾の如くならしめば、なんぞ虜を
患へんや。且新の言、草率と雖も一にその窺睹する

に出でたり。肉食坐禪する者の比に非ず。

と感心してゐる。同じく、間も無く、こんどは、蘭船やメレケン船に由りマカホ、カントン、ジャガタラ國まで漂流した船頭、善松が訪ねて來て色々物語りした。或は北海談、果ては南洋談に「外史」も殆んど成稿し、壯心勃々たる山陽如何ばかり心を動かしたことであらうか。北邊恂々、志士其の學ぶ所を試むる秋とも申すべくや。僕弱冠にして兵法を學び、其の後は純一の書生に御座候處、實に杞憂此の事に御座候。

弊藩には、公儀打拂ひの御號令につき、別に觸之あり。此事武士に於て驚くべき事にあらず、騒ぎ立て申すまじくと申す事にて、人數の備へ之れあり、僕父子も行伍に編し候。

何分、方今の時勢、大才力の人、大威信の人、國邦を鎮靖し候はねば、事の結局、未だ知るべからず候。何卒、白川侯御歸役させたまき事に御座候。と山陰の親友、池口忠恕に手紙してゐるのである。

更に文化七年、長崎警備のために出張中の龜井昭陽へ

地政學者としての頼山陽

の手紙に

ともに臺上に坐して、彈劍悲歌、右に玄海に俯し、左に太白の星を瞰て、古今の邊防を論ぜん

と國防の上に少なからぬ關心を示してゐるのである。

「章ヲ尋ネ、句ヲ摘ミ、以テ一生ノ大業トナスハ、亦已ニ陋ナリ。(中略)吾ハ、東海千載ノ下ニ生レタリト雖モ、生レテ幸ニ男兒タリ。又儒生タリ。イツクンゾ奮發立志、以テ國恩ニ答ヘ、以テ父母ヲ顯ハサザルベケンヤ」(立志論)。

と既に少年時代に確立せる彼の信念と、その詩を以て、その史を以て、國家有用の實學たらしめんとした、彼の地政學的傾向はこれらの所論となつて現はれ、或は國家國防上の多大の關心となり、或は國體明徴の論となつて「國恩ニ答へ」んとしたのである。而して國防に當りては「僕父子も行伍に偏し」地政學的卓見に依る實踐に踏み出してゐる所に眞の彼の地政學を觀るのである。

七、結

び

山陽は所謂才と學と識との三長を具へた良史である。而して識見に於て殊に卓越してゐる。(鹽谷溫、頼山陽と日本精神)彼の國體明徴と勤王の精神に至つては茲に新しく論ずるまでもない。吉田松陰の「野山獄讀書記」の中にも「外史」「政記」「山陽詩鈔」の名が見えており、これらが松下村塾の教科書とせられたことが知られるのであるが、その國土意識に於いても彼此相通するものがあつたのである。「離_レ地而無_レ人、離_レ人而無_レ事、故欲_レ論_レ人事、先觀_レ於地理」と言ふ餘りにも有名な松陰の立言、誰か山陽外史と關係これ無しと言ひ得られやうか。山陽が嘗て同郷の後輩にして、本居宣長に師事してゐた橋本稻彦と、和漢の學について意見を交換したことがあつた。稻彦は相當な國粹論者であつたらしく、山陽は彼を「本居流の和學者、狂人也」ときめつけてゐるのであるが、彼を通じて山陽は「凡て萬の事も物もみな皇國ぞ本にして他國へおのづから流れ及びたるものにて(中略)吾が彼に似たるには非ず」とする本居一派の稍偏狹な國粹論に對して

余嘗テ、ソノ徒弟(注、橋本稻彦)ニ謂ツテ曰ク、子等、我國ヲ小視ス。故ニ介々然タリ。漢ヲ抑ヘ、和ヲ掲グルヲ務トス。余ガ如キハ、オモヘラク、我ガ邦ハ至大ナリ。四外ノ貢スルトコロヲ取リ、以テ我ガ用トス。何ゾ敢テ漢ヲ以テ對トナスト。其ノ人爽然タリ。(本居氏ノ家言ヲ讀ム)

と答へる。實に明快なる所論である。「海宇ノ大勢」より觀たる中正なる認識であつて、對立を超えたより高次元の八紘爲宇的、皇道に基ける日本地政學的國土觀である。

これを要するに、詩人山陽には、個々の細かい地政學的記述こそはその數多くはないが、その精神に於いて、その根本理念に於いて、最も卓絶せる地政學者であつたと謂ひ得る。往々にして、地理學者が詩人であることがあるが如く、詩人山陽は亦一面偉大なる地政學者であつたと稱しても敢て過言ではないと信ずる。

附記、本稿の文獻は木崎好尙編、頼山陽全集、同書翰集に依る。尙、同全集中の山陽全傳には據る所多し。いことを特記しておく次第である。

(昭和十八年十一月二十一日)